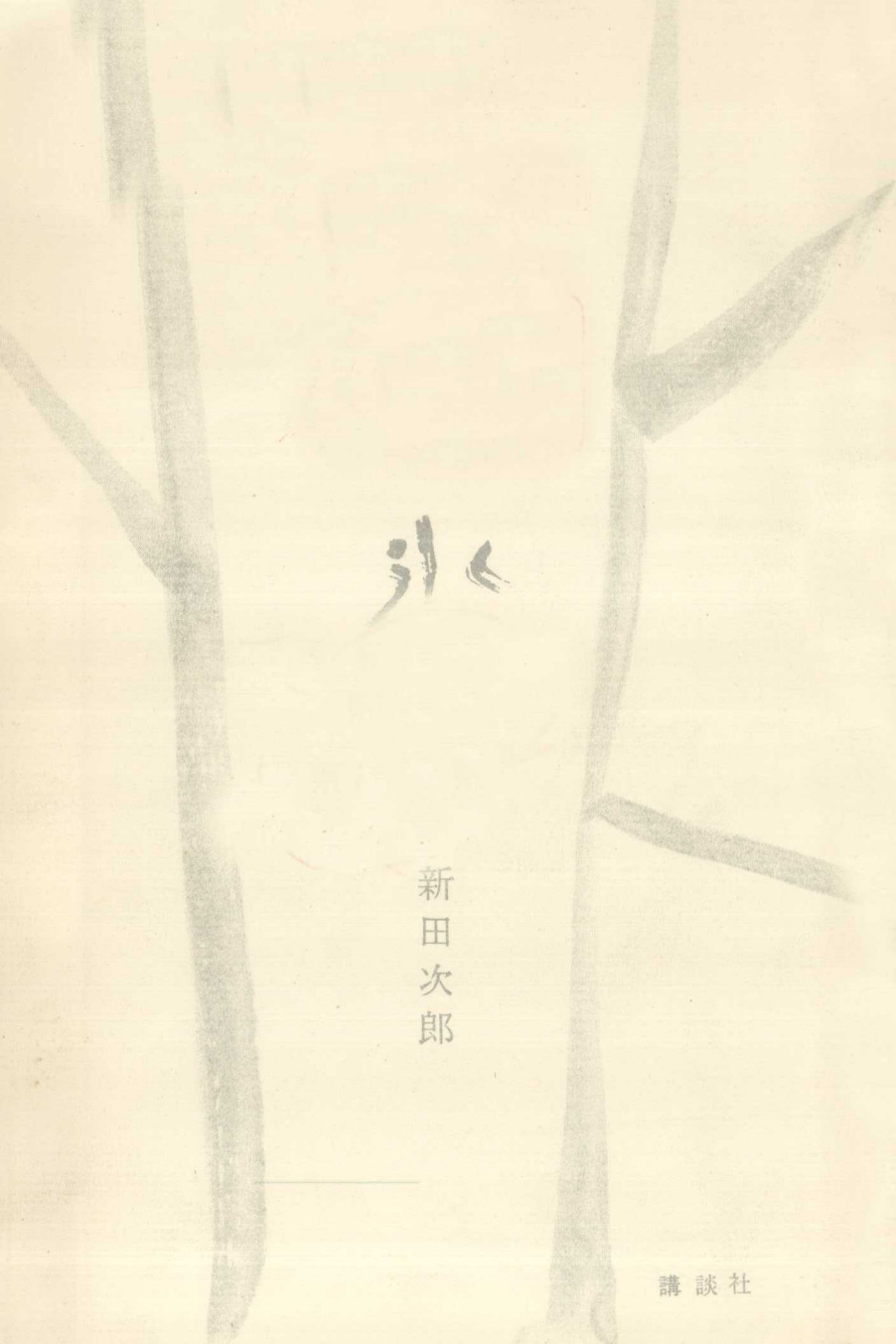


蒼氷

新田次郎



引

新田次郎

講談社



蒼 氷

昭和 32 年 9 月 15 日 再版発行



著 者

新 田 次 郎

東京都文京区音羽町 3-19

¥ 280

発 行 者

野 間 省 一

東京都中央区入船町 2-3

印 刷 所

永井印刷工業株式会社

発行所

東京都文京区
音羽町 3-19

株式
会社

大日本雄弁会講談社

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

(大進堂製本)

蒼

氷



守屋紫郎は、富士山頂観測所の狭い部屋のベッドの中で、暴風雪の音を聞きながら、日記を書いていた。

風の音は二様に鳴っていた。富士山頂の巖頭に衝突して起す轟音と、観測所の遙か上空のあたりで作り出される鞭をふるような音である。風の呼吸と呼吸との間にしばらく続く間隙があると、その後に必ず襲つて来る突風が、瞬間的にその附近の空気を引攪つて行く。その真空状態に向つて、守屋の肉体に潜んでいる大気の圧力はバランスを要求する。その度に守屋は鼓膜にきゅんと起る痛みを感じて眼をつむつて堪えねばならない。ほんの瞬間ではあつたが、両眼の間に針先を擬せられたような氣持だつた。気圧の差に引かれて、ドアーがかたりと音を立てた。

外はそれ程の暴風雪であるのに、観測所の中は静かだつた。観測所員は寝ていた。風速

計の自記装置だけが、カチカチと性急な音を立てている。器械の音から守屋は、瞬間風速は三十米以上だなど思つた。突風のはげしいせめ合いがすむと、風の強さは一定になつた。

（馴れるということは恐ろしいことだ。吾々科学者は現象に馴れるべきではない）

守屋はそこまで書いてペンを置いた。吐く息が白い。枕カバーに吹きつける息が凝結して薄い湿つた膜を作つていた。彼は日記を閉じて電灯を消した。彼は眠りつく前の時間を、寝たまま外側に傾斜している二重ガラス窓を透して星を見ることにしていた。星が窓の端から端に位置を変える迄に眠りつく。それまでの時間が一日のうちで最も楽しい時間であるのだが、吹雪に荒れている夜は、日記をつけたら、ちぢこまつて眼をつむるより法がなかつた。

多様に喰ひ合う風には多様に応ずる共鳴がある。山頂全体が創作する咆哮に対して、富士山頂観測所足下の噴火口は共鳴した。それは限りなく深いところから湧き上つてくる慟哭のように長い週期を持つて続いていた。

音がした。風とは関係のない、窓のあたりに何か衝突した音だつた。守屋は頭で考えられるものを一応考えてみる。見当はつかなかつたが、氣象測器類の故障だとすれば、手取

り早い処置を取らねばならないと思つた。やつと温まつた身体に再び防寒具をつけると、枕元の提電灯ていでんとうを取つて、ベッドを下りて中央の広間に出た。測器類はすべて順調に激しい風を自記している。

守屋が再びベッドに入つて天井を向くと、何かが屋根に這い上るような音がした。続いて屋根の上を滑り落ちる音がした。

守屋は起き上つて、すぐ隣室に寝ている強力の小宮正作の部屋をノックした。

「小宮君、起きてくれ、変な音がするんだ」

守屋は防寒具をつけ、ベッドの下のアイゼンとピッケルを持つて廊下に出た。

ザイルで身体を結び合つた守屋と小宮は注意深く観測所の外壁にそつて進んでいった。風に対する不自然な突起物である観測所に対して、容赦なく風が攻め立てていた。瞬間的な風陰が出来たり、雪の渦動が出来ていた。一方の風圧をこらえていると、不意に逆風に胸を突かれた。

守屋の部屋の外は窓から屋根にかけて雪の吹き溜りのスロープが出来ていた。吹き溜りの中に黒いものがじつとしている。提電灯を向けるとウィンドヤッケを着た人間が雪の中

にうずくまっていた。声をかけたが返事がない。向けた提電灯の光にかすかに首を上げただけだった。肩を押すと、くずれるように雪の中に倒れて、頭だけはしきりに持ち上げようとしていた。ピッケルをしつかりと握っていた。小宮が男の脇の下に手を入れて抱え起して、提電灯を顔の真正面に向けると、呻くような声と共に光を払いのけようと手を振った。どつと吹き寄せて来る吹雪に抱き合つたままの二人がよろめく。寄せ合つた力が解けると、男は棒のように倒れた。

小宮の肩に担がれた男は観測所の中央広間の電灯の下に連れて来られても口を利けなかった。眼は閉じたままだった。アイゼンの片方とリュックザックを失くしていた。雪眼鏡の中に雪がたまつていて、眼鏡を除くと、ばさりと雪の塊が落ちた。ピッケルは握りしめたまま、なかなか離そうとしないので、小宮が一本ずつ指を離してやつた。男は殆んど意識を喪失していたが、抱き起して首を持ち上げてやると、うつろな眼を開いて、すぐがくりと首を垂れる。それでも、ブランデーのコップを口に持つていくと、飲むだけの元気はまだ残っていた。守屋は遭難者の首を抱きかかえるようにして耳元で叫んだ。

「ひとりですか、あなた一人ですか……」

すると男は、遠い記憶の片隅から魂を呼び返されたかのように、初めて意識を持った顔を上げた。ぞつとするように青い顔であつた。

防寒具が完全であつたために、男は凍傷からは免がれていた。

ストーブの消えている広間の中へ凍つた風が吹き込んでいた。

「僕のベッドに寝かせよう、今迄寝ていたんだから、まだ温いに違いない……」

守屋は主任の窪沢に同意を求めた。

風は一定の速度に変わりつつあつた。風の強さと方向が絶えず変化している間はその生長期にあつたが、一定な強さと方向になつてくると、やがて治まることは分つていた。守屋は自分のベッドに眠っている遭難者に眼を向けた。運のいい男だと思つた。彼の登つて来た方向が、ほんの一メートル数十センチだけ北の方へそれていたら、噴火口へ落ちていただろう。自分がもう数分早く日記帳をとじたら、彼は観測所の窓の外でおそらく凍死しただろう。彼が生きていたのは偶然でしかない。吹雪になつてから、頂上観測所へたどりつくまでの十時間の間、男のたどつた道は分らないが、単独行を敢てした男だけあつて、装

具はかなりしつかりしたものをつけていた。

遭難者はベッドの中で時々うめき声を上げて、身体を反転した。その度に、かけてある布団がずり落ちそうになる。守屋は中央広間から椅子を持つて来て、掛布団が落ちないようにつつかい棒をしてやつた。男の顔に赤みが出ていた。最早、危険なものはない。ベッドの下に登山靴が揃えてあり、毛糸の靴下が押しこんであつた。壁にウィンドヤッケが掛けてあつた。小宮が整理して置いたのだ。

部屋を出ようとして、守屋は男の穿いて来た白い靴下に眼を止めた。赤い毛糸で編みこんだ頭文字が見えたからだつた。それは守屋が、椿理子から贈られたものとあまりによく似ていた。赤い蝶が羽搏きをしているように見えた。

（これもなにかの偶然なんだろう）

守屋は部屋を出た。中央広間で、ひとりで寝るつもりだつた。

守屋は男の寝ている部屋のドアを後手で閉めながら、広間の向うの壁を見た。ピッケルが数本吊り下げてあつた。その中に一丁だけ見なれないものがあつた。遭難者のものである。

そのピッケルは幾分か長身の古風な型のもので、ピックを前にして、いくらか、おじぎをした恰好で入口の方を向いていた。それはいかにもバランスの取れた、前進が続けている登山者の手に持たれている自然の姿にも見えた。

ピックの長さとブレードの幅などから見て、それが、日本で作られたものでないことは一眼で分つた。

(見たことのあるようなピッケルだな)

守屋はそれを手に取つた。重い手応えのするピッケルだつた。金属部品は黒く光つていて、十年、二十年と使いこんで出た、鉄の本当の色だつた。守屋は電灯の下に持つていつて更に細かく観察した。ピックの面に、シェンクの文字が小さく、刻みこんであつた。それはかつて見たことのあるものとあまりにもよく似たものであつた。

椿理子の家は三鷹にあつた。二階建ての洋館で、富士山に見える二階の一室が彼女の部屋になつていた。

「このピッケル、伯父様の遺品よ」

そう云つて理子の見せてくれたピッケルがシェンクのピッケルだつた。

「とつてもいい伯父様だったわ、でも無口で淋しがり屋で、山のこと以外はあまり話したことのない伯父様だったわ」

椿家と古くから交際していた守屋紫郎も、この山好きの理子の伯父椿武男についての記憶は、殆んどなかった。ずっと前、彼が中学生だったころ、会ったことはあるにはあったが、椿家の応接間で、気むずかしい顔をして、パイプの煙をはいている横顔しか覚えていなかった。

「あいつ変人だよと、うちの父は伯父様のこともいつも云つてたわ。でも、わたしをとて可愛がつて下さつたし、若し、俺が死んだら、このピッケルは理子にやるよと云つていたの。伯父様がスイスに行つていた時、買つて来てから、死ぬまで持つていたピッケルなのよ、これ」

椿武男は数年前の冬、奥穂高で行方不明となり、遺体の発見されたのは、夏になつてからであつた。彼の山への生涯は単独行に始つて、単独行に終つた。

彼と運命を共にしたピッケルは、シェンクの晩年の作であつた。本来このピッケルは椿武男がシェンクに注文して作らせたものではなく、シェンクが晩年の頃、山案内人のため

に作つたもので、その男は客を案内してウェッターホルンに登つた時、雷に打たれて死んだ。落雷を予測して、数メートル先の岩かげに置いたそのピッケルには落雷しなかつた。

シェンクの作品としては、いささか細身のもので、シェンクの若い頃の作品のように、がつちりしたのではなく、道具としては、むしろ優美に過ぎていた。老いたシェンクの精魂をこめた芸術品としての品位を認めて椿武男が買い求めたものであつた。

椿武男が理子にやろうと遺言したのも、彼女が、将来山登りをするために云つたのでは勿論なかつた。本来の目的に使われなくとも、美しい理子と共にあることが、このピッケルにふさわしいと直感したものであらう。

守屋はそのピッケルに関心を示した。これほどのものを持つて見たいという気持は、守屋に限らず、山登りなら誰でも考えることであつた。

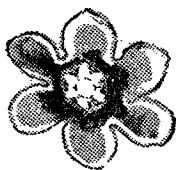
「すばらしいものですね」

守屋は何度もそれを云つた。下さいとは勿論云えないし、富士山頂の冬期勤務の際に一度でいいから使つて見たいからと申し出ることも遠慮して、ただ機会あるごとに、この逸

品を讃めることは忘れなかつた。

（あれとこれとは別物だ）

守屋はシェンクのピッケルを壁に掛けた。シェンクの作品が、何本か日本に來ていることは知つていた。理子の持つているシェンクとこれとが同一だと云う証拠はなにもなかつた。



桐野信也がベッドを出たのは十一時に近かつた。雪に埋められた窓は掘り出され、そこから青い空が見えた。風は相変らず吹いていた。中央の広間は八畳敷ぐらいの面積があり、広間を囲んで個室があつた。広間の中央にストーブが燃えていた。

「どうです気分は……」

観測所員は時々声をかけたが、それ以上にも聞こうとしなかつた。ひどく忙しそうに

立廻つていた。

桐野はストーブの傍の椅子に腰をかけて、頭の中のことを整理しようとした。太郎坊を出発した時のことは覚えてゐる。新雪の上にまぶしく太陽が輝いていた。三合の小屋の上でアイゼンをつけた。その頃から風が出たが、頂上はよく見えた。五合目あたりから吹雪になり、下ることも登ることも困難になつた。そこで桐野は山を登る場合と、下る場合の危険性を比較した。富士山の麓は広い、吹雪の中に道を失つたら最後、太郎坊にたどりつくことは、絶望と見るよりなかつた。頂上に向つてつめていけば、そこには必ず観測所がある。風は強いが、山登りにかけて、自信はあつた。装備も完全だつた。桐野は立つたまま、チーズとチョコレートを食べた。

そこまではつきり彼の記憶に残つていた。食ってから腕時計を見ると四時を過ぎていた。その時の時刻がはつきり焼きついたまま、頭の中で停止した。それから時間の経過はなかつた。唯前進していることだけを意識していた。どこをどう歩いたかの記憶もさだかではなかつた。重く足につきまとう雪をふみながら、登つてゐるのではなく山を下つてゐるのではないかと考えたこともあつたが、雪が無いところになると、足にひびく固い感

覺で氷壁であることを意識の底につかまえて、ピッケルを立てた。

幻聴はその頃から始つた。女の笑い声だつた。いかにも楽しくてたまらないというふうな笑い声だつた。登つても登つても女は彼よりも高位の場所に笑つていた。女が椿理子であることは、その笑い方で分つていた。彼は笑いに引かれて、前進を続けていた。観測所に到着することが目的ではなくなつていた。富士山頂観測所を訪問して、理子の云う、すばらしい科学者たちに会つて見ることなど、どうでもよくなつていた。まして、守屋紫郎という人物が、どのような男であり、その男の何処に理子が牽かれてゐるかを確かめたいなどという、登山の動機はとつくに彼の心から失われていた。

それからはずつと空白だつた。気がついた時には寝台に寝ていたのだ。

桐野は後頭部に痛みを感じた。寝不足の時の痛みと似ていた。彼は、手を頭に上げた。

「頭痛ですか、それは気圧のせいですよ」

鬚髯^{ひげ}面の男がそう云つて笑いかけた。山賊のような顔をした男だつたが、きれいな眼をしていた。歯が白く光つていた。年齢は分らない。

「小宮君、昼食にしようじゃないか」